

## フランス・アンシャン・レジーム末期から 第一帝政時代における建築史

フランスにおける18・19世紀建築は、1989年の革命二百周年を画期として、様式史から文化史・社会史へと変化を遂げてきた。とくに新古典主義と総括される19世紀様式建築を当時の文化的・社会的文脈において理解する流れが存在する。具体的には建築を巡る同時代の言説・出版、建物の使用と受容／保存と修復の問題がある。

従来復古主義・折衷主義の名の下に否定的に理解されてきた18世紀末から19世紀末の様式建築の見直しを行なっている。これまでは建築家・建築史家ジャック＝ギヨーム・ルグランの言説・設計を中心に、当時の建築論ならびに建築が社会にもたらしていたイメージ・建築の背後にある世界観について研究している。

右図：「近世ギリシアの地図」マリ・ガブリエル・フロラン・オグスト・ド・ショワーズル・グフィエ『ギリシアのピクチャレスクな旅』より(«Carte de la Grèce moderne», Marie-Gabriel-Florent-Auguste de Choiseul-Gouffier, Voyage pittoresque de la Grèce, 1782)



今後は、ルグラン以外の同時代の建築家も対象とするとともに、続く世代の建築家に研究を展開したいと考えています。とくに18世紀後半の新古典主義の主要な美的価値のひとつである「ギリシア趣味」は19世紀にも継承され、1820年代のギリシア独立戦争と相俟ってあらたな建築的想像力の源泉となっています。



戸田 穰 講師

学部：環境・建築学部 学科：建築デザイン学科  
所属研究所：建築アーカイヴス研究所  
博士(工学)。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。東京理科大学PD研究員を経て、平成23年本学講師就任。

Keyword

建築史／近代建築